

怖ろしい「第二の誕生」 —— W. B. イェイツ “The Second Coming” を読む

柿原 妙子

序

この謎めいた短い詩が書かれたのは1918年夏から1919年にかけてのことである。結婚して間もないイェイツと妻ジョージは自動筆記のオカルト実験に没頭し、見えない「指導者」との対話を通して明らかになる驚くべき歴史の仕組みに興奮していた。それによると、2000年近く続いたキリスト教の時代がまもなく終わり、これから新しい時代が始まろうとしているのだった。「指導者」はそれを二つの巨大な円錐の運動として説明した。“The Second Coming”のベースにはこのような時代交替の構造がある。

聖書によれば、磔刑死したキリストは再び世に戻ってくると預言されているが、その知識を持ってこの詩を読んだ者は最後にこれからベツレヘムで生まれようとしているのがキリストではなく不気味な怪物であることに衝撃を受ける。キリストの再臨を意味した“The Second Coming”の中身が覆されてしまうのである。ところで、Stollworthyの草稿研究によれば、作品中で“Second Coming”の箇所は当初はキリスト教の含意の弱い“Second Birth”であった。最終稿ではキリスト教の含意から来るインパクトが強い現フレーズに変更されたわけだが、実のところ彼が描きたかったのはキリスト教時代が終わることへの危機感ではなく、ある大きな時代が終わって次の時代が始まろうとしているという時代の大転換の様相だったのではないだろうか。そして、そのような二つの時代の境目の出来事が「第二の誕生」であり、イェイツにおいてはそこで“rough beast”という怪物の赤ん坊が想像されているのだ。

ところで、新時代の到来をこのような誕生の比喩で表わしながらイェイツ自身は新時代をどのように考えているのだろうか。この点に関して批評家の意見は一致していない。イェイツが暴力的時代を恐れているとの解釈もEllmannを始めとして多く、またCullingfordのように少なくとも文章上では彼が破壊を喜んでいるとしか思えないと当惑する者もいる。逆に最近の著作で“‘The Second

Coming' is a celebration of the rough beast, not a lamentation.”と断言したのは Bloom である (185)。また、“the center cannot hold”や“the best lack all conviction”などのフレーズはしばしば出典を明記されずにジャーナリズムにおいて使われることも多い。オカルトめいた曖昧なイメージの記述や預言者風の身振りのために詩人の真情が見えにくく、特定のフレーズに関して読者の想像力が先走りが必要な作品といえるかもしれない。

自動筆記の話をもう少し続けよう。妻ジョージは夫のオカルト実験に霊媒として協力しながら、やがて第一子を妊娠、2月に無事に出産した。その直前の1月に“The Second Coming”は発表されている。ところでジョージの伝記 *Becoming George* にはこの時期のあるエピソードが紹介されている。いつものように自動筆記をしていると、17世紀に生きたジョージの祖先の公爵夫人アン・ハイドであると名乗る霊が夫妻にメッセージを送ってきた。アン・ハイドはかつて自分が死産した男の子を（そしてその次には彼女自身を）をこの世に再び生まれさせたいと希望しており、ジョージがこれから身ごもる子供がその子の生まれ変わりだというのである。¹ 夫婦はこの「お告げ」に驚き、アン・ハイドなる人物の存在を歴史資料で確認したり、その墓を訪ねようと計画したりした。現実には生まれたのは女の子だったので、夫妻はこの子をアンと名付けた。

自宅に揺りかごを用意して赤ん坊の誕生を待っていたイエイツがこの時期に書いた“The Second Coming”は、この過去からの転生エピソードも含めて「誕生」と縁が深い作品だ。それから引続きイエイツ作品には「誕生」がしばしば見られるようになり、時代や社会へのイエイツの関心がこの比喩に凝縮されるようになる。「誕生」は“The Second Coming”だけでなく、後期イエイツ作品の重要なモチーフとなっていくのである。そこで本稿では「誕生」という事象を切り口として、この問題作の読解を試みるつもりである。その際に重要と思われるのは〈恐怖〉の感情である。時代の大転換を象徴する「誕生」には強い不安が伴う。生まれるのがどのような子供かによって次の時代の様相が決まってくるからだ。“The Second Coming”では荒々しいビーストがもたらすものは冷酷な暴力的世界であると予感され、そこから名状しがたい恐怖の感情が生じるわけだが、“The Second Coming”の詩行を読む限りはイエイツがその恐怖について否定的に考えているとは思えない。それどころか詩人は喜んでしていると感ずる者さえいるのだ。ではいったいイエイツにとって恐怖とはどのような感覚なのか。そしてそれはどのようにして彼の作品に現われたのか、これらの点を

以下の章で考察してみたい。

I

まず、この作品が完成した1919年1月という時期について確認しておこう。イエイツは当時53歳。アイルランドで起きた復活際蜂起という衝撃的な事件の直後、急くようにしてモード・ゴンと娘イズールトに求婚をし、二人から退けられた後は年若いイギリス人女性ジョージ・ハイド＝リーズと結婚していた。結婚直後は神経症状に苦しんだものの、妻ジョージから自動筆記ができることを示された後は、彼女とともにオカルト実験に夢中になっていく。ジョージはほどなく妊娠し、1919年2月に夫婦の第一子である女兒アンを出産した。“The Second Coming”が書かれたのはこの出産の前月のことである。世界に目を転じると、前世紀から引き続いて社会主義運動や女権拡張運動が力を増していた。1917年にはロシアで二度の革命が起き、その一方でドイツやイタリアではやがてヒトラーやムッソリーニの舞台を用意することになる極右的運動が起きつつあった。またアイルランドでは、復活際蜂起を契機に勢いを増した独立運動を抑えるため、イギリス軍が暴力によってアイルランド国民を日常的に脅かしていた。自分たちを取り巻くこのような社会の激変を感じながら、イエイツと妻は自動筆記実験を続けていたのである。

実験ではジョージが媒体となって見えない「指導者たち」のメッセージを言葉や絵でイエイツに伝えた。そのメモは450回のセッションで3600ページ以上という膨大な量に及び、やがて1925年には*A Vision*という書物の形を取ることになる。² “The Second Coming”が発表された1919年時点ではまだ作業の途中ではあるものの、世界の動きを巨大な二つの円錐（ガイア）の回転及び交合運動として表わすという基本的な理解は固まりつつあった。時間は約二千年を単位として円錐の先端から底面までの側面を螺旋状に動き、その行程がひとつの時代に相当する。キリストの誕生から始まった現時代はほぼ終わろうとしており、まもなく新時代の円錐と交替すると二人は考えた。

Turning and turning in the widening gyre
The falcon cannot hear the falconer;
Things fall apart; the center cannot hold; (1-3)

この冒頭部は巨大円錐の広がった底辺近くの旋回を表現している。上空をまわ

る鷹は地上の鷹匠がいる一点から遠く離れてしまった。今や旋回の面積は最大限にまで広がって、円錐の形が保持できなくなっている。それに対して最後に語られるラフ・ビースト誕生はもうひとつの円錐の先端部分の出来事である。広がって脆弱になっている最初の円錐に対して、第二の円錐の動きは始まったばかりの突端にあって、強く先鋭である。このような図式的な構造をまず理解しておく必要がある。

新旧二つの時代は“The Second Coming”だけでなく、コンパニオン・ポエムと呼ばれる“A Prayer for My Daughter”にも描かれている。“The Second Coming”執筆が妻の出産直前だったのに対して、“A Prayer”は長女が誕生した直後に書かれている。父となった詩人は自宅であるバリリー塔付近で海から吹きつける荒々しい風の音を聞き、これから成長する娘は隠れた場所でしっかりと根を張って茂る樹のような女性になってほしいと願っている。彼が考える理想的女性は“innocence and beauty”を備えており、それは“custom”と“ceremony”から生まれるとされるが、このように表現される旧時代の価値観は“The Second Coming”では“The ceremony of innocence is drowned”と、まさに終焉を迎えようとしている。そして“A Prayer”で荒々しく吹き荒れている風、つまり到来した未来は、“The Second Coming”では世界に放たれた“mere anarchy”あるいは“The blood-dimmed tide”と表現される。³ ところがここで見逃せないのは、Vendlerが指摘したように、“A Prayer”においては外の嵐についても同じ“innocence”の語が使われていることだ (Yeats's Vision 100)。

Imagining in excited reverie

That the future years had come,

Dancing to a frenzied drum,

Out of the murderous innocence of the sea. (13-16, 強調は筆者)

つまりイエイツは古いキリスト教時代と荒々しい新時代の双方にイノセンスという属性を見ているのだ。“The Second Coming”と“A Prayer”は別個の作品ではあるが、同時期に書かれて共に新旧の時代に言及していることから極めて強い関係性を持つと考えられるため、両作品におけるこの語の使われ方は重要である。OEDによるとイノセンスの語義には“Doing no evil; free from moral wrong, sin, or guilt (in general); pure, unpolluted” (A.1.a) と共に、“Having or showing the simplicity, ignorance, artlessness, or unsuspecting nature of a child or one ignorant of the world” (A.3.a) もある。特に後者の語義はこれから生まれようとする

るラフ・ビーストに当てはまりそうだ。古い時代の人々だけでなく、暴力的な行動を起こす新時代の人々もまたイノセンスを持っており、単純に否定すべきではないとイエイツは考えているのである。

「血の潮」に譬えた暴力をイノセントと呼ぶのは直ちには理解しがたいし、楽観的すぎると現代の読者には感じられるかもしれない。この点を理解する上で思い出す必要があるのは、作品が書かれたのがイエイツ夫妻が自動筆記の実験に没頭した時期であることだ。自動筆記の資料に基づいて *A Vision* 成立の経緯を詳細に研究したマーガレット・ハーパーをはじめとする最近のイエイツ研究者は、妻との実験がイエイツとその作品に多大な影響を与えたことを指摘している。作品のテーマにこのオカルト実験の成果が直接的に現われるようになってくるのだ。夫と同じくオカルトに強い関心を持ち、夫よりも哲学などの教養が豊かだったジョージは、イエイツを新しい知的興奮へ導いたといえるだろう。膨大な自動筆記のメモを見ていくと、1917年クリスマスには「指導者たち」から歴史の動きを理解するためのシンボルとして「じょうご」の形状を使った説明を受けている。のちに *A Vision* の主要な概念となる旋回する二つの円錐の姿がこの時点から徐々に明らかになり始める。また、両者の対話の過程では世界の不調和についての話も出ている。“‘Is this work made possible by a certain harmony of nature’ asked the new husband on New Year’s Day 1918. The reply, ‘harmony or rather *discord* [is] necessary’” (M. Harper 297). この“discord”とは二つの円錐が象徴する対立を指すと思われる。これら〈真理〉の発見を彼は作品に表現しようとした。この頃レディ・グレゴリーに書いた手紙は彼の興奮をよく伝えている。“I live with a strange sense of revelation ... You will be astonished at the change in my work, at its intricate passion!” (*Letters* 643-44)

しかし、ジョージとの実験から得た知識による興奮だけではイエイツの態度を説明する根拠として十分とはいえないだろう。次章では彼自身の若い日の回想を紹介しながら、イエイツ作品で表わされる時代の大転換に登場する破壊的ビーストのイメージ、そしてそのビーストが介入する「誕生」という現象について考察していきたい。

II

イエイツが少年時代を回想した次の文章は暴力への潜在的願望を表わしていて興味深い。

“When I was a boy everybody talked about progress, and rebellion against my elders took the form of aversion to that myth. I took satisfaction in certain public disasters, felt a sort of ecstasy at the contemplation of ruin,... I began to imagine ... a brazen winged beast that I associated with laughing, ecstatic destruction.... Then I wrote ... *Where There is Nothing*, a crude play with some dramatic force. ... A neighbourhood inflamed with drink, a country house burnt down, a spiritual anarchy preached!” (*Explorations* 393, 強調は筆者)

世の中の〈進歩〉という考えに反抗し、大災害が起こって廃虚になればいいと願い、彼は翼を持ったビーストが笑いながら破壊行為を行っている姿を想像している。隣家に火がつき、屋敷は燃え落ち、“a spiritual anarchy”が説教をしている。この“a brazen winged beast”がのちのラフ・ビーストのモデルであると彼は語っている。このような破壊者のイメージを彼はたびたび頭に描いていたようで、*Autobiographies*には1880年代を振り返った次のような発言もある。ここでは破壊者として“a black Titan”を想像している。

... there rose before me mental images that I could not control: a desert and a black Titan raising himself up by his two hands from the middle of a heap of ancient ruins. (*Autobiographies* 161, 強調は筆者)

ふたつの回想において、破壊する者は人間ではないビースト的生き物であることは注目すべきだろう。そして更に重要なことは、イエイツが人間とビーストとの合一から偉大な瞬間が生まれると考えていたらしいことだ。Melchioriは次のような指摘をしている。

For some hidden reason ... Yeats saw the crucial events, the most important moments in universal and personal history, as produced by the conjunction and the conflict of human and animal forms. The animal symbolizes not only the lowest physical impulses uncontrolled by reason ..., but also the superhuman, transcendental powers, the miraculous and the prodigious which cannot be accounted for in rational terms. (78)

イエイツにとって動物とは理性でコントロールされない低級な衝動を持つ者であるだけでなく、超人的な力を持つ優れた存在でもあるのだ。たとえばギリシ

ア文明の始原としての白鳥と人間の交合を書いた“Leda and Swan”において、人間レダを襲う白鳥はゼウスが変身した超越的存在でありながら、同時に翼やクチバシ、心臓の鼓動など動物的な生々しさをも持っている。白鳥をはじめイエイツ作品に登場する一角獣やロバなどの動物たちは、何を考えているのかがい知れない不可解さを持つが、同時に先のOEDの「イノセント」の定義にあるように、単純、無知、無技巧であり、世知に欠けた子供のような存在でもあるといえる。また、その動物たちはイノセントであると同時に性欲を持つことも重要だと思われる。Vendlerは“The Second Coming”に見られる性的充溢感に着目し、人間の暴力の原因は性的に満足しようとする衝動であると述べている（*Discipline* 75）が、暴力的な破壊行為を行ったり人間と性交したりするビーストも性衝動を持つ者であり、そして時代を転回させる暴力はそのような衝動が原動力となっているとイエイツは考えているらしい。

このようにして、イエイツ作品において時代が展開する瞬間に動物が関与するということが分かってきたが、やがてそこに「誕生」が関わってくる。⁴ Melchioriは、イエイツが初めは社会の新しい変化を“return”や“renewal”の語で表現していたが、ある時期以降は“birth”の表現をするようになったこと、そしてそのきっかけとなったのが復活祭蜂起であったことを指摘している（63）。「誕生」というメタファーの最初期の例は、“Easter 1916”のリフレイン、“A terrible beauty is born”であろう。この有名なフレーズは日本語では「恐ろしい美が生まれる」と訳されることが多いが、“beauty”の語は「美女」をも意味する。若者の犠牲の血を浴びて「恐ろしい美女が生まれる」とも解釈できるのだ。この美女とはアイルランドの象徴、*Kathleen Ni Houlihan (Shan Van Vocht)* である（Keane 7）。彼女はふだんは老婆だが、若者たちがイギリスへの反乱を企てて命を捧げたときに若く美しい女に変身する。これがアイルランドの歴史において何度も繰り返されてきたとする民間伝承の人物である。イエイツは蜂起という出来事を「老婆が美女へと変身する」ではなく、「美女が生まれる」と表現した。蜂起が起きたのがキリストの復活を祝う祭日であったし、蜂起の暴力が出産における荒々しさ、出血、痛みなどを連想させたためである。⁵ 暴力的破壊行為がイノセントな動物的性欲から起きることを前に述べたが、アイルランド史を大きく転回させた復活祭蜂起においてもイエイツは同様のことを感じている。恐ろしい美女キャスリン・ニ・フーリハンはその魅力で若者を惹きつけ、彼らの犠牲の血を浴びて生まれ変わるのだ。異形のものである彼女からもある種の動物的性欲が感じられる。

以上の考察で、イエイツに破壊的行為を望む傾向があったこと、その破壊はビースト的な者が行うこと、そして破壊による時代の転換をイエイツが人間とビーストの合一、及びそれによる「誕生」の比喩を使って表現するようになったことを見てきた。これらを念頭に置いて、“The Second Coming” のスフィンクスのような怪物、そして今から生まれるとされるラフ・ビーストを見てみよう。

... somewhere in sands of the desert
A shape with lion body and the head of a man,
A gaze blank and pitiless as the sun,
Is moving its slow thighs, while all about it
Reel shadows of the indignant desert birds.
The darkness drops again; but now I know
That twenty centuries of stony sleep
Were vexed to nightmare by a rocking cradle,
And what rough beast, its hour come round at last,
Slouches towards Bethlehem to be born?

初めにイメージされる半人半獣の怪物は男性的な太陽神であるエジプトのスフィンクスを連想させる。まわりを旋回する怒った鳥は、鷹が鷹匠に属したように、スフィンクスに属するようだ。不可解ではあるが圧倒的な力を秘めたこの怪物のゆっくりとした“thighs”の動きは性的能力を連想させる。このイメージと重ねられるラフ・ビーストはこれから生まれようとする赤児であり、従ってイノセントではあるのだが、スフィンクスの歩みを反復するようにゆっくりと歩を進める不気味さがある。スフィンクスのまばゆい太陽を目指すようにラフ・ビーストが歩くのは胎内の暗闇である。ところで、この赤児の「誕生」は詩全体の構造においても表現されている。この詩はソネットの形式を取るようでありながら、8行めでいったん切れた後に再び始まっているが、これは Seamus Deane が指摘したように、出産がいったん中断し、また始まっているように思える (175-76)。Vendler も詩全体が生まれようともがいていると感じている (*Yeats's Vision* 102)。

「二度目の誕生」は恐ろしいと詩人は予言している。しかしそのような陰鬱な未来であるにも拘わらず、これらの詩行を見る限りは詩人がこのラフ・ビーストを否定的に見ていると判断できるような表現はなく、レダを襲ったスワン

を偉大な知恵を持つ者として見たように、“The Second Coming”における新時代の暴力的な主役をもイエイツは超越的存在として見ているようだ。何を引き起こすか分からない者への漠然とした恐怖は確かにあるが、その恐怖は彼にとって拒絶すべきものではないのである。いやそればかりか、「どんなラフ・ビーストが生まれようとしているのか」という疑問文によってキリストの再来を想定して読んでいた者に衝撃を与える詩人は、その行為に喜びを感じているようにさえ思えるのだ。

III

コンパニオン・ポエムである“The Second Coming”と“A Prayer for My Daughter”の双方において、古い時代が去りつつあり、新しい時代が迫っているという歴史認識が見られるが、“A Prayer”では古い時代を象徴する娘が“custom”や“ceremony”に従う女性になってほしいとの父親としての願いが述べられるのに対して、“The Second Coming”の“ceremony of innocence is drowned”には人間的な嘆きや憤慨の感情はあまり感じられない。それどころか先に述べたように、イエイツは新しい時代のラフ・ビーストを超越的な者として肯定しているようだ。つまり、一方では古い時代が続くようにと願い、他方では新しい時代に期待するという矛盾があるのだ。この「壊したい」と「守りたい」という相反する願望を理解する一助として、以下にイエイツが愛好した2作品、William Blakeの詩“The Mental Traveller”とWilliam Morrisの長編詩*The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs*を紹介したい。どちらも一つの時代からもう一つの時代への移行を表現したもので、イエイツに少なからぬ影響を与えている作品である。

“The Mental Traveller”は男と女、若さと老い、喜びと悲しみという対立する概念が交互に現われる詩である。最初の連では男の子が喜びとともに生まれるが、この赤ん坊は老いた女に預けられ、手荒な仕打ちを受ける。彼が成長するに従って女は若くなり、やがて赤ん坊になる。このように二つの対立物は相互に交差しながら逆転していくのだが、この構造がイエイツの*A Vision*に影響を与えた可能性は高い。*A Vision*でイエイツは「人の思考や心の動き」を月の28相に当てはめて説明しているが、その“Phase 2”（新月）の解説に“The Mental Traveller”の一節が引用されている。

But when they find the frowning Babe,

Terror strikes through the region wide:
They cry “The babe! The babe is born!”
And flee away on every side. (AV 1937, 106)

二つの円錐の回転や月の満ち欠けによって人や社会の変化を説明する *A Vision* には大いなる真理を発見した詩人の知的喜びが感じられる。その発見とは、世界はこのように前進し、逆転し、またそれを繰り返すという真理である。⁶ その図式をブレイクの “The Mental Traveller” は端的に表現しているといえる。

しかし、一方でイェイツには、“A Prayer” に表わされているようにこれまでの文化への愛着も同時にあって、素晴らしい世代が絶えずに続くことへの感動がモリスの *Sigurd the Volsung* への強い愛好に見られるのである。この長編詩はアイスランドの古いサガをモリスが書直したもので、強くて気高い王と彼が死んだ直後に生まれた彼の息子の物語である。イェイツの *On the Boiler* の語り手はこの中のある誕生の場面を情熱的に引用する。

It may be, or it must be, that the best bred from the best shall claim again their ancient omens. And the serving women “shrank in their rejoicing before the eyes of the child,” and “the hour seemed awful to them” as they brought the child to its mother:

“And she said: ‘Now one of the earthly on the eyes of my child has gazed
Nor shrunk before their glory, or stayed her love amazed:
I behold thee as Sigmund beholdeth — and I was the home of thine heart ---
Woe’s me for the day when thou wert not, and the hour when we shall part.’”
(*On the Boiler* 27, 強調は筆者)

イェイツが引用しているのは、父王が死んだ後に、身ごもっていた妻が男の子を出産する場面だ。乳母たちが赤ん坊を取り上げて、母である女王に渡し、女王が感極まって赤ん坊に語りかけている。語り手の “The best bred from the best” という言葉はモリスの原作からの借用であり、原作ではモリスはこのフレーズを2度繰り返して強調している。ここで注目したいのは、赤ん坊を女王へと渡す乳母たちがこの赤ん坊が神々しすぎるため “awful” だと感じていることである。(この言葉については後述したい。) イェイツはこの物語をよほど好んだらしく、オリビア・シェイクスピア宛の手紙に「この話を娘のアンに読むとき涙が出て読めなくなり、ついで妻ジョージに読もうとしても同じようになる」と

告白している (*Letters* 816)。“The Mental Traveller”を引用した*A Vision*においては歴史の大転回に対して個人的な感情を示さなかったのに、*Sigurd the Volsung*の不変の継承にイエイツが激しい感動を表わしていることは興味深い。

いずれにしても、愛好したこの二作品からイエイツが〈誕生〉をある世代の終わりりと次の世代の始まりの境界にある危機的な瞬間と見ていたことがわかる。第一の世代(親)が喜びに満ちたものであっても、次の世代(子)はどうか予想がつかない。子の誕生、即ち「第二の誕生」によって世界の様相は大きく変わり得るのだ。そしてイエイツには誕生してきた者が前の世代が築いたものを破壊してしまう展開を受入れ、その破壊に幾ばくか期待する気持ちと、同時に前の世代が次へと完璧に継承されていくことに激しく憧れる心情がある。一見、正反対のように見えるこの両傾向がイエイツの中に共存するのである。

IV

破壊的転回への期待と古い価値観の継承への憧れ。この二つの心情は彼にとって真に正反対のものだろうか。二つの心情が共存することは矛盾なのだろうか。この問いへの答えを求めするために、この章では〈恐怖〉という感覚に焦点を当てながら、二つの時代の交替をイエイツがどのように考えていたかを探ってみたい。

イエイツがその暴力的破壊力を恐れながらも期待を寄せている新時代と、このまま続いてほしいと願う旧時代の両方に「イノセンス」という共通の資質を見ていることは先に述べた。ビーストが持つ汚れを知らない純粋さや子供のような単純さを彼は肯定しているのである。“The Second Coming”ではこの「イノセンス」という資質から生じる結果としての「恐怖」が描かれている。何を考えているか計り知れないスフィンクスの「空っぽで太陽のように無慈悲な凝視」、そしてラフ・ビーストのゆっくりとした歩みのイメージは強い不安と恐怖感を喚起する。再臨するのはキリストではなく、不気味なラフ・ビーストだったという衝撃とそれに続く恐怖がこの作品の中心にあることは間違いない。しかしこの恐怖感是否定的なニュアンスを帯びないばかりか、混ざり気がなく乾いており、どこか崇高な印象さえあるのではないか。

このような恐怖を表わす言葉として、先ほどの“The Mental Traveller”と*Sigurd the Volsung*における“terror”と“awful”がある。“The Mental Traveller”では最初の赤児は“joy”と共に生まれるが、彼が年を取り次に若返った結果再び

生まれたときに、人々は“terror”を感じ、四方に散るように逃げてしまう。これはキリストの誕生につづくサイクルで誕生するラフ・ビーストに当てはまるだろう。しかめっ面の赤児の誕生が恐怖感を呼び起こすのだ。そのような誕生とは正反対の神々しい誕生が *Sigurd the Volsung* の赤児のそれである。ここでは赤児を取り上げた乳母たちが“awful”に感じていることは先に述べたが、素晴らしい赤児に“terrible”に近い意味である“awful”という形容詞が与えられている。しかめっ面の赤ん坊の誕生も神々しい赤児の誕生も、ニュアンスの違いはあるが共に「怖ろしい」と感じられているのである。

「誕生の恐怖」を理解するために参考にしたい作品がもうひとつある。キリストを受胎したマリアの心情を綴ったイエイツの詩“Mother of God”である。3連から成るこの詩は最初から最後までマリアが感じた「恐怖」を描いている。

The three-fold terror of love; a fallen flare
Through the hollow of an ear;
Wings beating about the room;
The terror of all terrors that I bore
The Heavens in my womb. (1-5)

レダを襲うスワンを想起させるような精霊の羽ばたきがマリアの部屋に満ちる。精霊による懐妊という事実に対して、無力な彼女はただ非常な恐怖を感じるのみである。それは天上の Trinity から受ける愛の恐怖 (“The three-fold terror of love”) であり、総ての恐怖のうちでも際だった恐怖 (“The terror of all terrors”) なのだ。絶対者が起こそうとしている人間の理解を超えた世界の転回を自分自身の体内に知った彼女は「髪の毛が逆立つ」思いをするのである。

This love that makes my heart's blood stop
Or strikes a sudden chill into my bones
And bids my hair stand up? (13-15)

これらの例はどれも新旧二つの時代の境目の出来事としての「誕生」を扱っており、その誕生に対して人間たちは恐怖を感じている。その恐怖は混じりけのない純粹感情としてキリストの誕生という最善の出来事にも正反対のしかめっ面の赤児の誕生にも同じく生じている。“The Second Coming” のラフ・ビース

トの誕生にもこのような恐怖感がある。超越的な力を持つものの力によって起る世界の大転回を目にした無力な人間が感じる恐怖の感情。人間は選ぶのではなく選ばれるのであり、歴史の大転回は“the uncontrollable mystery” (“The Magi”)として、突然に目前に示されるのである。無力な人間が感じる恐怖には巨大な力への驚きと畏怖の念がある。ゆえにその恐怖感には悪に対する常識的な判断が入り得ないのだ。このような恐怖の感覚こそ、この作品の眼目であり独自性と言えるのではないか。

このような恐怖が表現される背後にはいくつかの要因があった。先に述べたような緊迫した世界情勢や、当時の社会に多く存在した終末論的な言説がまず考えられる。更には Harrison など多くの批評家が指摘するニーチェの影響も明らかである。イエイツは 1902 年にニーチェ思想と出会って以来、彼から多大な影響を受けたが、その中でも作品上で最も顕著なものに晩年の多くの作品に通底する“tragic joy”がある。これからやってくる荒々しい時代を肯定的に捉える態度は、恐怖の中に喜びを感じるものであり、“tragic joy”の萌芽と言えそうだ。また、イエイツがブレイクとニーチェの類似に注目したことも我々には興味深い点だ。ニーチェは対立によってこそ進歩は遂げられるという考えをたとえば次のように表わしているが、ここにはブレイクの“The Mental Traveller”との類似が見られはしないか。「すなわち芸術の発展というものは、アポロ的なものとディオニュソス的なものという二重性に結びついているということだ。それはちょうど生殖ということが、たえずいがみあいながら、ただ周期的に和解する男女両性に依存しているのに似ている」(36)。⁷ 更にニーチェは『悲劇の誕生』において、古代ギリシア人の醜いものや謎めいて破壊的なものへの渴望は彼らの満ちあふれる力や健康から発生したと述べており(17)、それはこの時期のイエイツの活力溢れる創作を連想させる。創作力は男性性の現われであると常々考えていたイエイツは自分に創作意欲が湧いていることを喜んでいたが、その喜びは“The Second Coming”にも感じられる。ニーチェの言葉を借りるなら、怖ろしいラフ・ビーストの想像は詩人の「力から、みちあふれるような健康から、ありあまる充実から生まれた」と考えられそうだ(17)。そして最後に、イエイツの恐怖感覚に対してニーチェにも劣らない影響を与えた要因として、妻ジョージの自動筆記の影響を追記しておきたい。Ellmann は自動筆記実験の途中で“terror”の語がしばしば出て来たことを重視している(257)。イエイツ作品において“terror”あるいは“terrible”が圧倒的な印象をもたらすようになるのは復活際蜂起以降のことである。つまり誕生の比喩と本格的な恐怖表現は同じ時期に始まったと言えるのだ。その後もジョージとの自動

筆記でイエイツの恐怖の意識はますます研ぎ澄まされ、*A Vision* を執筆する頃には常に念頭に“terror”の語があったことを彼自身が回想している。“When I was writing ‘A Vision’ I had constantly the word “terror” impressed upon me” (*Boiler* 17).

最後に、“The Second Coming”に表現されている恐怖は極めて観念的なものであり、人間としての生の感情からは遠いものであることを確認しておきたい。Vendlerは“The Second Coming”でイエイツは災難や変化を承認しているが、それは知的な承認であって感じられたものではないと述べている。同様にCullingfordも、実際のアイルランドやヨーロッパの情勢をイエイツが見た際の反応から考えて、彼には私的スタンスと預言者的スタンスの両方があったと考えている(161)。このように、“The Second Coming”において超越的な力を持つものに屈しながらもその力に対して生じる恐怖感を描くイエイツだが、このとき彼は歴史を俯瞰する高い位置に立っているのであり、そのような位置から預言者の興奮と恐怖を表わしているのだと考えられる。詩人をコミュニティにおける特権的な立場の人間と見るのは、彼の生涯変わらない持論であった。しかし、自身の娘が生まれた後の“A Prayer”では詩作の視座は地に足をつけた普通の人間のものに近くなる。そこでは“The Second Coming”と同じ世界観を示してはいるものの、より人間的な感情が語られていると考えられるだろう。

結語

キリスト教時代の終焉と荒々しい時代の到来を描く“The Second Coming”と“A Prayer for My Daughter”に共通する言葉「イノセンス」を糸口として、新しい時代に向けたイエイツの視座について考察してきた。若い頃から獣的な者による破壊を夢想する傾向があったイエイツは、20世紀になって社会が大きく変動し始めてからはビーストと人間の合一によって時代が大きく転回すると考えるようになり、その転回を「誕生」という象徴に託して表現した。新しいものが誕生する際には不安とともに恐怖の感情が生じるが、イエイツにおいては誕生の恐怖は決して否定すべきものではなく、むしろ新しい文化をもたらすしるしとして捉えられた。神々しい誕生であれ、不気味な誕生であれ、新しい時代を拓く「第二の誕生」には常に恐怖が生じる。どちらの場合も超越的な力を持つ偉大な存在に対して、人間はそれを受入れるしかないからである。そのような確信に基づいた恐怖の表現が“The Second Coming”の眼目といえる。

対立物があってこそ進歩があると考えたイエイツは旧時代の穏やかさと新時

代の荒々しさという両極端を提示した。“The Second Coming” が書かれたのと同じ1919年に彼は次のように語っている。

As all realisation is through opposites, men coming to believe the subjective opposite of what they do and think, we may be about to accept the most implacable authority the world has known. Do I desire it or dread it, loving as I do the gaming-table of Nature where many are ruined but none is judged, and where all is fortuitous, unforeseen? (*Later Essays* 45)

目前に迫った激しい変化を裁かずに受入れるイエイツの姿勢には、これから晩年にかけての重要な鍵語、“tragic joy”に発展する思想の萌芽がある。圧倒的な力で転回していく世界に対して常に受け身でしかない人間だが、それでも転回を積極的に受入れることで喜びを感じる。イエイツの「恐怖」の感覚の根底にはこのような美意識があり、恐怖が生じる際の衝撃こそが彼にとっての“revelation”なのである。

注

本稿は第48回日本イエイツ協会大会（2012年10月14日、於佐賀大学）のワークショップ「イエイツの‘The Second Coming’を読み解く」においてパネリストとして発表した内容を加筆修正したものである。

1 アン・ハイドがこの話を打ち明けたのは1918年3月のことで、それ以後も彼女はたびたび現われて夫婦にメッセージを送った。イエイツはこの一件について、“the most important piece of psychic research I have ever done”と述べている。（1919年7月30日付書簡。Saddlemeyer, 227）

2 *The Making of Yeats's A Vision*, vol. 1:x.

3 草稿段階の言葉からイエイツがロシア革命やフランス革命を念頭に置いていたことが分かっている。

4 この白鳥を始めとしてイエイツ作品には不可解な動物が登場するが、詩と戯曲では登場する動物が異なっており、戯曲においては一角獣、ロバ、鷲などの動物が新しい時代の始まりと密接に関わっている。そのひとつの例として、戯曲 *The Player Queen* では旧時代を象徴する女王が一角獣と交わっているらしいという噂が街に流れる。この街に住む年寄りの“Beggars”は定期的にロバのように背中が痒くなるのだが、彼が藁の上に転がっていなくとき時代の転回が起こり、女王と交替するように巡業中の劇団の女優デシマが新しく女王の座に就いてしまうのである。晩年の戯曲 *The Herne's Egg* では英雄

的な男コンガルが死んだ直後、先に白鷺と交わった女古い師アトラクタが男の召使いに向かって「いまからわたしと交わろう。わたしが妊娠し出産したら、コンガルが人間の身体を持って生まれ変わることができる」と詰め寄る。だが驚いた召使いは躊躇し、その間に近所で妊娠していたロバが子供を生んでしまう。結局、英雄コンガルは人間ではなくロバとして生まれ変わる。

5 キリスト教の祝日の出来事が異教的伝説に転換されている点でも“Easter 1916”は“The Second Coming”と似ている。蜂起を起こしたピアスらのことを4連ではワイルドに走りまわった子供に譬えて彼らに一種のイノセンスを認めている。彼らに代表されるアイルランド民衆もまた暴力的だがイノセントな存在であり、蜂起以降は彼らが新しい時代を担っていくようになる。

6 この真理を表現するためにブレイクは多くの動詞を現在形にしているが、この時制はイエイツの“A terrible beauty is born”でも踏襲されている。

7 イエイツはレディ・グレゴリー宛ての手紙に“Nietzsche completes Blake & has the same roots ... I have not read anything with so much excitement since I got to love Morris's stories which have the same curious astrigent joy.” (*Collected Letters* 284) と記している。

引用文献

- Blake, William. *The Complete Poems*. London: Penguin Classics, 1977.
- Bloom, Harold. *The Anatomy of Influence: Literature as a Way of Life*. Yale UP, 2011.
- Cullingford, Elizabeth Butler. *Yeats, Ireland and Fascism*. London: Macmillan, 1981.
- Deane, Seamus. *Strange Country: Modernity and Nationhood in Irish Writing Since 1790*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Ellmann, Richard. *The Identity of Yeats*. New York: Oxford UP, 1964.
- Harper, John Mills. *The Making of Yeats's A Vision: A Study of Automatic Script*. (Vol. 1) Basingstoke: Macmillan, 1987.
- Harper, Margaret Mills. *Wisdom of the Two: The Spiritual and Literary Collaboration of George and W. B. Yeats*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Harrison, John R. “What rough beast?: Yeats, Nietzsche and Historical Rhetoric in ‘The Second Coming’.” *Papers on Language & Literature* 31.4 (1995): 362-88.
- Keane, Patrick, J. *Terrible Beauty: Yeats, Joyce, Ireland, and the Myth of the Devouring Female*. Columbia: Univ. of Missouri Press, 1988.
- Melchiori, Giorgio. *The Whole Mystery of Art: Pattern into Poetry in the Work of W. B. Yeats*. London: Routledge, 1960.
- Morris, William. *The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs*. London: Longmans, 1911.
- Saddlemyer, Ann. *Becoming George: The Life of Mrs W. B. Yeats*. New York: Oxford UP, 2002.
- Stallworthy, Jon. *Between the Lines: Yeats's Poetry in the Making*. Oxford: Clarendon Press,

- 1963.
- Vendler, Helen. *Our Secret Discipline: Yeats and Lyric Form*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2007.
- . *Yeats's Vision and the Later Plays*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1963.
- Yeats, W. B. *Autobiographies*. Ed. William H. O'Donnell and Douglas N. Archibald. New York: Scribner, 1999.
- . *A Vision*. (1925 ver.) New York: Macmillan, 1961.
- . *A Vision*. (1937 ver.) London: Macmillan, 1937.
- . *The Collected Letters of W.B. Yeats*. (Vol.iii) Ed. John Kelly. Oxford: Clarendon Press, 1994
- . *Explorations*. London : Macmillan, 1962.
- . *Later Essays*. Ed. William H. O'Donnell. New York: Scribner, 1994.
- . *On the Boiler*. Shannon: Irish UP, 1971.
- . *The Letters of W. B. Yeats*. Ed. Allan Wade. New York: Octagon, 1980.
- . *The Variorum Edition of the Plays of W.B. Yeats*. Ed. Russell K. Alspach London: Macmillan, 1966.
- . *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. Ed. Peter Allt and Russell K. Alspach. London: Macmillan, 1957.
- ニーチェ, 『悲劇の誕生』 秋山英夫訳, 岩波文庫, 1966.